

大阪府連における登山者養成：大阪の新たな挑戦 2016 その1

教育遭対部長 中川和道 20160922

1. はじめに

本稿は2016年7月2-3日に東京で行われた「全国遭難対策担当者会議」における中川の発表「大阪の新たな挑戦2016」をもとにしたものです。

リーダー不足に悩んでいる山岳会が多い、労山大阪府連では教育遭対部がリーダー学校[1]やスタンプ制単発講習会[2]をはじめたのを契機に「リーダー不足をどう解決するか?」「そもそもリーダーとは何か?」という議論がなされてきた。「スタンプ制単発講習会はつぶれる。スタンプ制単発講習会ではリーダーは育たない。体系的教育ではないから」「リーダー学校を開校しても受講生は来ない。リーダーは責任を負わされるのでなりたくないから。」「リーダーとは何か?自立した登山者とどう違うのか?」「リーダーとはコーチ・講師のことか?」「リーダーは養成できるのか?自然な成長を待って現れるのを待つことしかできない」など、考察すべき論点は豊富かつ重要で、どれも面白い。

リーダーの役割は何かを考えると、引率登山と自主登山とに分けて考えるとよいと溝手康史「登山の法律学」[3]は指摘した。引率登山とは引率者が参加者に対して安全配慮義務を負う登山で、自分が負うべき自己

責任の範囲では安全が確保できない参加者を含めた登山の場合には引率者が参加者の安全を配慮する義務がある。例えば、ガイドによるツアー登山、学校登山、公開ハイキングなどである。これに対して自主登山は私たち成人の山岳会など自立性自主性に基づいて行われる登山で、危険の認識や相応の自己責任を前提としている。本多



写真1 はじめての雪山講習会 2016年3月5日 大山

勝「リーダーは何をしていたか」[4]は引率登山の問題点をめぐり出した5件の事故の取材記事で、リーダー論について調べ始めると多くの人がまず出会うものであろう。

リーダーについて考えるうえで、山岳雑誌『岳人』が2012年10月号で組んだ特集記事「2012年のリーダー論」[5]も興味深い。この特集では、登山を3つの類型に分け、(1)プロガイドがリーダーのいわゆるツアー登山、(2)山岳会など組織された山岳団体による登山、(3)未組

織登山者によるいわゆるグループ登山、それぞれにおける遭難事例をあげてリーダーの行動が論じられた。その遭難事例を受けて、尾形好雄、黒川恵、溝手康史、洞井孝雄、渡邊雄二、手島亨の各氏が多彩な切り口からリーダー論を論じられ、最後の記事では救助に携わってこられた金邦夫、飯田雅彦の両氏が廣川建司氏の司会で対談されている。

本稿の目的は、「登山の法律学」[3]や『岳人』の特集記事「2012年のリーダー論」[5]をもとに、社会人山岳会とそれらで構成する山岳連盟である労山大阪府連において、現在直面しているリーダー不足問題を解決するため、現在求められているリーダーとは何かを考察し、その養成の方策を探ることである。なお、ここで言うリーダーは自主登山を行うためのリーダーであり、『岳人』の特集記事で言えば、類型(2)山岳会など組織された山岳団体による登山のリーダーである。引率登山におけるリーダーについては、本多勝一「リーダーは何をしていたか」[4][注1]などを参照していただきたい[注2]。

2. 自主登山におけるリーダーとは

「リーダーとは何か？リーダーに求められる能力とは？」という質問を考えてみた。この質問に対する答えを、中川が行った直接の討論や雑誌などから拾いながら集め、以下に列挙する。

- (a)リーダーとは、段取り係、雑用係、企画係である。ずっとやってもらい、大きな事故を起こさずに来た。重宝している。
- (b)語りがうまくクラブ会議などで人をひきつける能力。ネットの文章力も重要。
- (c)気象、食料、装備、医療、レスキューをまんべんなくやれる能力。
- (d)企画力、記録まとめ力。
- (e)体力、技術、知識、気力に優れて引っ張っていける能力。
- (f)目標を成功させる能力。引っ張っていける能力。
- (g)パーティーをコントロールできる能力。皆が納得できる提案ができ、説得の力をもつ。
- (h)レスキューが出来て、危険回避、困難克服、危機突破、問題解決の高い能力でパーティーを救う人。



写真2 スタンプ制講習会「山岳地形と読図 リーダー認定」2016年6月28日。

(i)体力、技術、知識、経験に加えて思いやりがほしい。

(j)面白い山を探し出し作戦を練り上げる力

などの答えが得られた。さらに少数ではあるが興味深い答えとしては下記のものもあった。

(k)岩登りでは先登者のことをリーダーLeader と言い後続者を Follower ということがある。この意味ではリーダーとは先登者すなわち先頭で登攀する人であって登山隊の指揮をとるパーティーリーダーではない。両者を区別することが必要である（保科雅則「アルパインクライミング」[6]では先登者を「リーダー」ではなく「リード」と呼び混乱を避けている。）

(l)クライミングのある分野では個人が高難度ルート1ピッチをトップロープで長時間トライすることがある。この場合には登攀者 Climber に必要なのは確保をしてくれる確保者 Belayer であり、先登者リーダーという概念はそもそも不要である。マルチピッチを自分が先頭で登攀したくなったとき初めて先登者 Leader—後続者 Follower あるという言葉が意味をもつ。

(m)クライミングの分野では、交互に先登し対等に確保する（いわゆる「つるべ」で登る）ためのパートナーが必要であり、パーティーリーダーはいらないのではないかと強固な関係の少人数ハイキングパーティーでも事情は同じだと思われる。

(n)コーチ・講師とリーダーは異なる。コーチ・講師とは単科目の教授者であるがリーダーとはパーティーリーダーをさす、と区別して考えるべきではないか？

次にリーダーと他の会員の関係を質問した。

(o)多くの山岳会で、ごく少数のリーダーが多くの参加者を連れて登山しているのが自主登山の実態[注 3]ではないか？全員が対等平等の実力という山岳会はないし、全員がリーダーなどはありえない。

(p)リーダーになることを目標に自分を高めてきた。多数の参加者を連れて登山を無事に完遂できるリーダーであり続けるために精進を重ねるのがリーダーの理想像だ。

(q)初めは誰でも連れて行ってもらう登山が前提。そのうちに少数だが安定したリーダーが生まれ、あるいは自分で育ち、みんなを連れて行くようになる。この原則で山岳会を運営している。

(r)近年はリーダーの成り手が少なくなったと感じている。リーダーになると責任が重過ぎると考えるのだろうか？連れて行ってもらうことが山岳会の存在意義と思っているかのようである。公開ハイキングを渡り歩くことにより自分の登山を追及し山岳会には入会しないまま自分の登山要求を実現する登山者もいると聞く。ガイド登山ではガイド料が高いが山岳会をガイド料ゼロ？のサービス機関として期待している。これ

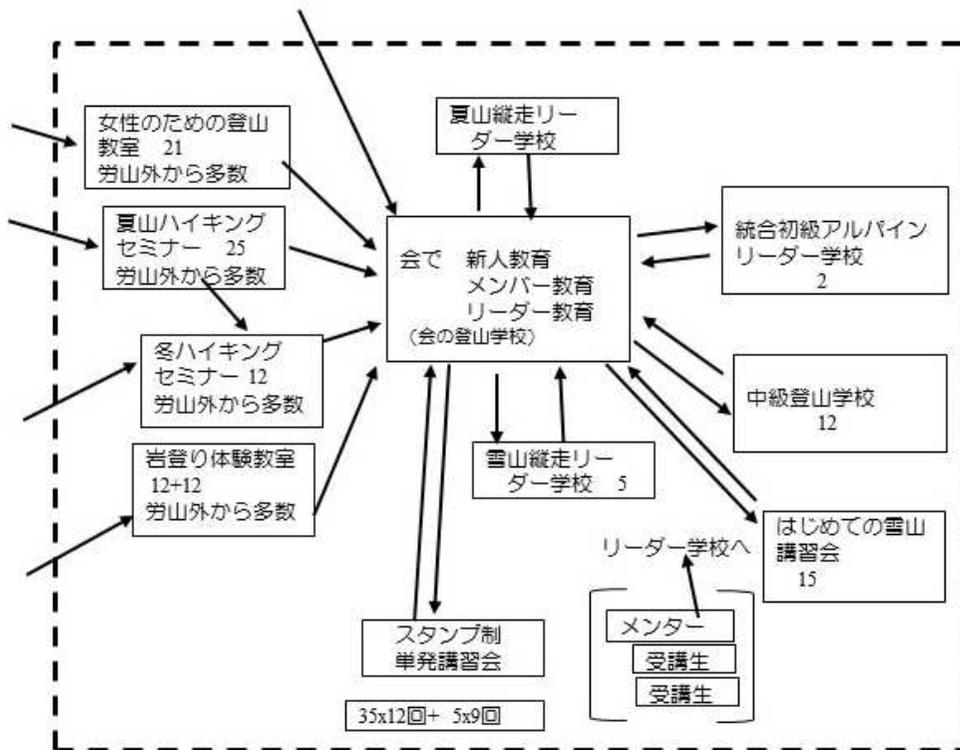
が自主登山[注 3]であろうか？我々はこれを目指して山岳会をやってきたのではない、次にリーダーをどう養成するか質問した。回答を列挙する。

- (s)リーダーに成長するには何年もかかる。
- (t)リーダーは自然に育つものであり育てようとしてもムリである。
- (u)リーダーは育てるものではない。育ってきたリーダーに対して、その資格検定あるいは資格試験を行ってリーダーの水準に達したと認定するべきものである。リーダーを養成する学校という概念は成立しない、ましてや期間1年のリーダー学校は本来成立しない。

これらの回答を素材に、現在直面しているリーダー不足問題を解決することを目指して、現在求められているリーダーとは何かを考察し、その養成の方策を探る。その前に大阪府連の教育体制について議論しておく。

3. 労山大阪府連の教育体制あるいは人の流れ

大阪府連全体の教育体制を図に示す。山岳会を図の中央においてその周囲に登山学校や講習会やセミナーを描き、人の流れを矢印で描いてみた。点線四角の枠で示すのが大阪府連



である。女性のための登山教室のカッコ中の数字 21 は 2016 年度受講者数を示す。点線四角枠の中に入る矢印は、労山外の方々が、女性のための登山教室、夏山ハイキングセミナー、冬山ハイキングセミナー、岩登り体験教室を経て労山の会員となられる他、個々の山岳会に直接入会される方も多いことを示す。労山大阪府連内部の教育組織には 2017 年夏開校予定の夏山リーダー学校を含めて図のように 4 つの学校と 2 つの講習会がある。もちろん会でも教育が行われており、泉州労山や豊中労山など大きな会では登山学校が開校されていて極めて先駆的である。これら以外にも近畿地方の労山県連府連の協議会が主催する雪崩講習会や大阪府連救助隊が定期的に行う搬出訓練、捜索訓練もある。

注目すべきはこれらの学校や講習会の 2016 年度受講者の総数で、系統的な登山学校やセミナーと講習会が 116 名に単発的なスタンプ制単発講習会の延べ 465 名を合計すると約 580 名にもなることである。大阪府連の総人数は約 1400 名だから、結構多くの方々に大阪府連の教育の機会を利用していただいていることになる。今年度の状況を大阪府連創立 50 周年にわたる時間軸を入れて考えるとさらに面白い。例えば中級登山学校は 2016 年度で第 38 期を迎えた。受講者数は多い年には 30 名をこえていたというから、平均約 20 名/毎年を仮定すると通算 800 人近いクライマーが中級登山学校を巣立ってきた。この方々は各会や大阪府連救助隊の中心的な役割を担ってきて下さった。大阪府連きっての古参会員 瀧上肇さんによれば、中級登山学校卒業生は結構高度な登山実践をしてきたものの死亡者 2 名であるという。中級登山学校が安全登山に果たしてきた役割は大きい。

次に、大阪府連では、「新人教育は各会で、リーダー教育は連盟で行う。連盟でのリーダー養成は直接養成とする」（第 54 回総会 2016 年 3 月 13 日）ことを基本に教育体制を再構築してきた。各会での教育と連盟での教育の関連について述べる。

「新しいことを学びたい」「もっと向上したい」という目標をもったものの自分の山岳会ではそういう教育が得られない時に扉をたく登山学校が「新人教育登山学校」「メンバー教育登山学校」である。ところが連盟が「メンバー教育登山学校」をやっていたのでは、卒業すると問題にぶつかる。自分の会ではそもそもその登山をやっていないし、教えてくれるリーダーがいないのでその登山学校に行ったのだ。だから、卒業したら帰る会がない。仕方なく次の年もまた次の年も再入学したりスタッフになったりして、その登山学校で自分の会では出来ない登山、自分では行けない山への登山をずっと目指す。会ではこの方の山行管理は不可能で、山行計画書はフリーパスという「特別な人」ができる。「メンバー教育登山学校」はかくして会では出来ない山行を提供するガイドの役割を担う。さらに、高齢化などを背景に山岳会が新人教育やメンバー教育を放棄せざるを得なくなるとの理由から「メンバー教育登山学校」を連盟に望む声もある。しかしこれは新人教育の対する会の任務放棄の側

面がある。連盟で「メンバー教育登山学校」をやってしまうとその登山学校卒業生の力量が所属山岳会では把握しにくくなりその人が出してきた計画書の判定が難しくなる。さらには上記「特別な人」は居心地のよさに感覚がマヒしていき事故の確率が上がる場合すらある。こういう時は、あっさり他の会に移るのがプラスであろう。会の執行部は、他会への移籍の可能性を含めつつ登山学校入学を許し、いざ移籍となれば、その方が新たな登山領域へと向上を目指す門出を祝う度量が欲しい。

連盟では、各会に戻って教育を担い得るリーダーを育てるのがよい。それも、「初心者教育を目的とする連盟登山学校を修了したあとも学校運営のスタッフとして残ってもらっているうちに数年すればリーダーは自然に育つ」という「間接養成」ではなく、リーダー養成を直接の目標とする「直接養成」がよい。日本の国立登山研修所やフランスの国立スキー登山学校などでもリーダー養成が行われているので、リーダー学校そのものが概念として成立しないはずはない。

以下、**4. リーダー像の検討と養成の方策** は次号に続きます。

注釈

[注 1]リーダー論について調べ始めると多くの人がまず出会うのが 1997 年出版の本多勝一

「リーダーは何をしていたか」[4]であろう。本多は、能力のないリーダーが引率登山[3]を行い、そのために悲惨な事故にいたった事例 5 件の取材記事を書き、大きな社会的反響を巻き起こした。引率登山が登山の全てではないことをよく知っている本多はこの著作で引率登山ではない最高級登山家の事故をとりあげて考察した（「定向進化」仮説）ものの、この著作は当時急速に成長してきた引率登山リーダーの問題点に主眼がおかれている。

「リーダーは何をしていたか」の冒頭で本多は「要するにこれは、バスを無免許運転して、それと知らずに乗った客たちを交通事故で死なせた場合と全く同じ遭難」だと断じ、さらに浦松左美太郎氏の評論[7]から長い引用をして本多の著作の狙いを強調した。浦松は「船が遭難すれば船長が責任を追及される。列車やバスが事故を起こせば、過失致死で運転士が責任を問われる。登山にもリーダーがあり、その判断と指導で未熟練者が行動して死亡したとすれば、過失致死で責任を問われてもよいのではないか。」と書いている。

「リーダーは何をしていたか」巻末の武田文男の文章も核心をつく。武田は 1865 年マッターホルン初登頂の際に起きた有名な遭難[8]について述べている。下山開始まもなく 1 人がスリップし 3 人を巻き込んで数珠つなぎとなって滑落し 4 人が死亡したことによりウ

インパーはスイスの法廷に召喚されたが、最終的には無罪となった。武田は「この裁判結果によって、登山中の事故は司直の手で裁かれることはないという「聖域」がつくられ、百年以上も登山界に影響を及ぼしてきたといっても過言ではありません。」と書いたあと、今では「時代は変わった」と述べて「そら恐ろしくな」る時代になったと筆を進めている。

[注 2] 引率登山には、ガイドによるツアー登山の他に、営利的な公募登山、学校の集団登山、高校山岳部など引率教師のみが事態を全面的に把握して行われる登山、山岳会などが一般募集で行ういわゆる公開ハイキング、素人を含む講習会・講習登山、危険回避能力が欠如した初心者を連れた登山なども含まれる。

自主登山とは成人の山岳会など自立性自主性に基づく登山で危険の認識や相応の自己責任を含む。大学山岳部は自主登山に分類される。

実際の登山の分類はやや複雑で、公募登山や講習会についても引率型と自主登山型とがある。ガイドが技術や経験が相当のレベルにある客を連れて危険性の高い登山をする場合は、引率登山であっても、客の自己責任の範囲が広がる。ウィンパーがガイドとともにマッターホルンに登頂した登山はガイド登山ではあるが、引率登山とはいえない、溝手[3]は言う。

[注 3] 溝手康史「登山の法律学」336 ページ[1]では、「成人の仲間同士の登山のほとんどは自主登山に該当しますが、しばしば参加者がリーダーに全面的に依存する形態の登山があります。しかし、参加者とリーダーの関係にそのような依存関係があったとしても、原則として自主登山になります。成人であれば自分の責任において安全性を考えるべきであり、依存関係という事実状態によって法規範が左右されるべきではないからです。」とされている。

引用文献

[1]中川和道「統合初級アルパインリーダー学校 第1期から第2期へ」、大阪労山ニュース 2015年6月号

[2]中川和道「スタンプ制単発講習会が始まりました」、大阪労山ニュース 2016年7月号

[3]溝手康史「登山の法律学」、東京新聞出版局、2007年。

[4]本多勝一「リーダーは何をしていたか」、朝日文庫、1997年。

[5]特集「2012年のリーダー論」、『岳人』2012年10月号。

[6]保科雅則「アルパインクライミング」、ヤマケイテクニカルブック6、2007年。

[7]浦松左美太郎「リーダーの責任—山の遭難に思う」、朝日新聞 1965年5月10日夕刊。

[8]E. ウィンパー『アルプス登攀記』 浦松佐美太郎訳、岩波文庫（上下）1936年。